岡崎がくどうの会だより　題字：自由王照平

発行日：2024 年 1 月 16 日

第 44 号

発行：NPO 法人岡崎がくどうの会
【TEL&FAX】0564-32-0325
【E-Mail】okazakigakudou@yahoo.co.jp

2023 年 11 月 4 日（土）から 5 日（日）の 2 日間にわたって、第 58 回全国学童保育研究集会が、パルテノン多摩（対面会場）とオンラインで開催されました。今回は、感想を含めたレポートを一部ではありますが、紹介します。

他の指導員のレポートは、ホームページ(https://okazakigakudou.jimdofree.com)に掲載されていますので、お時間のある時にお目通しください。

【岩井里真さん（たけのこクラブ　常勤専任指導員）】

分科会⑫『指導員の専任・常勤・複数体制、労働条件』

分科会のテキストの冒頭に『指導員自身が継続的に働きつづけられなければ、その施設も安定的に存続していけるとはいえないのではないかなと思います。』という一文があり、とても心に刺さりました。子どもにとっての安心安全、安定的な生活や遊びとは、『いつも』の環境なのだと感じました。いつもの場所、いつもの遊び場、いつものおもちゃといった物的環境は勿論のこと、いつもそばに居てくれる家族、学童保育所に帰るといつもいる友達、そして、いつもの指導員。これこそが安定的で安心できる場所なのだと感じました。また、指導員が安定的に働き続けられないことで、継続した保育の連携が困難となり得ます。1 人の指導員が保育するのではなく、複数の指導員で多角的な視野で、連続的に連携をとり保育することでより安心でき、安定的な生活ができるのです。このように、子ども達にとっても、そして学童保育で働く指導員にとっても安定的な場所を確保するために、指導員自身が継続的に働き続けなければいけないことを強く感じました。

分科会の前半は労働条件についてのレポート報告、後半は『長く働き続けるために』をテーマにグループワークを行いました。レポート報告では、給与面や休暇の大切さについて話がありましたが、グループワークでは、労働条件についてはあまり触れられず、そういった労働条件も大切ではあるが、環境面もとても大切という話で盛り上がりました。“長く働くために自分が居心地の良い働きやすい場であるか”や“指導員同士で意見を言い合い共有・共感できるか”が大切という意見が多く、中でも意見を言うのをためらってしまったり、我慢してしまったりして突然辞めてしまう方について議論が繰り広げられました。キャリアの長い方からは、「そういった時こそ飲み会で話ができるように飲み会を開くといいよね」と言う意見もありましたが、そういう場が苦手な方や、そもそも言えない方は、そういう場にも参加しないという意見も出て、最終的に解決は出来ませんでしたが、労働環境改善に努める大変さや難しさを強く感じました。

全ては子どもの為に繋がることではあるが、保護者、指導員、場合によっては地域や学校、そしてやはり何より子どもと、多方面に目を向け考え日々過ごしていかなければならないのだと強く感じました。

とても楽しい研修だったのでもっと時間が欲しかったです。

【大参凌久さん（あおぞらクラブ　常勤専任指導員）】

分科会①-3『学童保育指導員の仕事ってなぁに？』

学童保育は「安心して働き続けたい」という保護者の願いから生まれ、継続的な「生活の場」を保障することが役割となるというお話があったように、日頃学校が終わってからの時間や長期休暇中の多くの時間を子どもがすごす場所として、保育を通して役割を果たしていくことが学童保育指導員の仕事のひとつでもあるなと感じました。

上記の役割を果たすために、「それぞれの心身の状態を確認・把握する」「子どもの安全を守ること」を欠かさずにしていくことが重要となり、指導員だけでなく、子どもと保護者とともに学童保育での生活内容を豊かにする継続的な営みを大切にしていきたいなと思います。

「学童保育所が子どもの『居場所』となるために」のなかで、子どもの行動には必ず背景があり、うまく表現できなかったり、表し方が違う子どもたちもいるという話があり、自分が現場で保育を実践している時にも子どもの行動に悩まされる場面も多くあります。その時にも子どもがとった行動の背景を探ってみたり、それぞれの子どもがよく表現する表し方を考えるだけでその後の対応や声掛けに変化をつけていくことが可能になり、選択肢を増やしていくことができると感じたので日頃から様々な角度から見る癖をつけていきたいです。

テキストに「当事者意識」を持ち続け「考えることをやめない」とあるように、昨今さまざまな事件や問題が絶えず起きているなかで自分自身が当事者であるという意識を常に持ち「学童保育」について常に考え続けることが学童保育指導員として大事なことであり、今後の学童保育をより良いものにするためにも継続しなければいけないことだなと強く感じました。

【遠山祥子さん（つくしクラブ　非常勤指導員）】

分科会⑳『性について考える』

第 20 分科会では、性について学びました。

学童保育所で勤めていると、子ども達からドキッとするような質問をされて、返答に困ることがあります。そういったときの対応についてとても参考になりました。

例えば「下ネタ」→その言葉を聞きたくない人もいるよ。「自慰行為」→大切な場所だから、誰かのいるところで見せたり触ったりしないようにしようね。「セックスしたことあるの？」→プライベートなことだから答えたくないよ。

焦ったり迷ったりではなく、子どもと向き合うこと、嘘をついてごまかしたりしないことが大事だと学びました。

距離感については、指導員と子ども、子ども同士でもパーソナルスペースには注意をはらわなければと思いました。

高学年の異性が指導員の膝の上に座る。子どもが懐いてひっついてきてくれるのは嬉しいですが、保護者の目もありますし、私は高学年の異性が膝に座ってきた時は、上手くどかすようにしています。

子ども同士でも、低学年はまだ幼く、好きだからという理由で、密接距離でひっついているということがありました。両方が良くてひっついているのではなく、片方は嫌がっている状態です。ひっついていく児童には、今回の研修で学んだ、友達との距離感を伝えました。研修を受けた直後のできごとだったので、きちんと対応することができ、とても勉強になりました。

【花田幸奈さん（あおぞらクラブ　常勤専任指導員）

分科会⑲『子どもの気持ちに気づくー家庭で、学童保育で』

分科会では、講師が大学の教授をされているということで、講師が学生さんとかかわる中で感じたエピソードを話していただき、とても心に残るお話がたくさんありました。

冒頭で講師の、“子どもの気持ちに気づけるかどうかという前に、大人でも自分の気持ちに気づくのが難しいこともある”という言葉を聞き、ハッと気づかされました。子どもの気持ちを分かってあげたいと思うこと以前に、大人でもそういう状況にあるということを念頭に置いておく必要があると思います。また子どもたちが、“自分の気持ちに気づいて話を聞いてほしい”ときもあれば、“気持ちには気づいてほしいけどそっとしておいてほしい、話したくない”ときなど様々な場面があると思います。さらに、“この人にだったら信頼して話ができる”と思うことも、特に学年があがるにつれて増えていくと思います。講師も“この人には否定されないと学生さんに思ってもらえる存在でいたいけれど、自分自身も反省の毎日です“と仰っていて、つねに向上心をもち努力し続ける姿が印象的でした。私もいつまでも子どもたちと一緒に成長していきたいという気持ちを持ち続けていきたいと思います。

あらためて、今回のテーマである“子どもの気持ちに気づく”ということは難しく、もっと子どもたちとたくさん関わる中で学んでいく必要があると思いました。一人で考えていてはなかなか気づきにくいからこそ、指導員同士で話し合う場が大切で、子どもの気持ちを「こうかな？」「ああかな？」と想像していくことが大切だと気がつきました。ただ、必ずしも子どもたちの気持ちを分かろうとしすぎない、焦って話を聞こうとしない、ただ見守っているだけでいいこともあるということは忘れてはいけないと思いました。

【東　和江さん（風の子クラブ　常勤専任指導員)】

分科会⑰『今日の子どもの問題を考える』

いろんな問題が出ていましたが、不登校は増加していると聞き『そうだろうな』とも思いました。保護者自身が子どもの時に学校をいい居場所だと思っていなかった場合もあり保護者へ子どものいいところを話すことが大切だと、お話がありました。保護者対応にも繋がるかな、と思います。学校へ行く、ということも昔ほど重要視されていないことも拍車をかけており、多様性とは…と考えさせられました。

放課後の変化にも触れていて、塾や習い事によって大人から評価される時空間の拡大や友達と遊ぶのも相手の塾や習い事のお伺いをしてから遊べたり遊べなかったり、家に帰ってご飯を食べてお風呂など済ませて部屋に入って SNS やオンラインゲームをする子ども達も多くなっているみたいで、大人に制限されない時間が SNS やオンラインゲームになっているのではないかと、松田先生の「ね、忙しいサラリーマンみたいでしょ？」という言葉は印象的でした。

そして、私たちが意識を変えていく必要性を感じるのが「価値世界の多様性が当たり前であること」「セクシュアル、マイノリティ、障害など、自分とは異なる生き方をする人がいることへの慣れ」であり、子どもと関わる大人も変わることが求められるなと思うし、「尊重して話を聞いてもらえることは子どもにとって大切。」というお話を忘れたくないと強く思いました。

【吉川美里さん（なかよしクラブ　常勤専任指導員）】

全体会『どの子も受けとめる学童保育をめざして』

初めのオープニングでの来年度の岡山の子どもたちや 色々な地域の学童保育所の子どもたちの生き生きとした姿がとても印象的でした。地域の伝統的な文化や踊り、遊びを大切に受け継ぎ、全員で楽しく共有できることは素晴らしいと思いました。中でも大阪の学童保育所の、通常の放課後の姿、普段遊んでいる様子をたくさんの写真で見られたことがとても参考になりました。そして、周りに家など何もなく、部屋の中でフラフープをやっているような広々とした施設を建ててもらえる学童保育は理想でした。

全体会の記念講演は毎年楽しみにしていますが、講師が東京大学大学院、京都教育大学准教授という経歴から少々緊張してかまえていました。しかし、講師自身が学童保育「中退」という言葉から始まり、それでも“学童保育は楽しかった印象が強く残っている”という貴重な話でした。

肢体不自由の子どもが先生と一緒に登った滑り台の話。その時の空の色まで覚えていたほどのたった 1 回の経験が、その子にとって一番の思い出という話もありました。私自身かつて幼稚園教諭だった頃、肢体不自由の子どもを受け持っていた時の経験を思い出しました。その先生と同じ考えから、最大限寄り添えるようにと、くろこの限界まで挑戦した劇あそびの会。卒園後に「劇あそびの会が忘れられない！ほんとに楽しかったよ！」と、とびっきりの笑顔で言ってくれたことがありました。今も昔も変わらず…子ども一人一人の気持ちを考えて、今何が出来るか丁寧に寄り添っていこうと思いました。他にも、たった 1 回経験したことが、その子どもにとって本当に豊かな生活の経験となっていることが感じられる 1 年生の子の作文がありました。“いつの間にかそうであるような学童保育生活”が送れるようにしていきたいと思いました。

その経験自体が後々に何をもたらすとかそれをやったおかげで後々あれが出来るようになった、こういう人間になったという考え方に偏ることなく、その時期がそれで充実していたということが大切。（有名な著書の言葉を要約すると）これを聞いた時、まさしくこれこそ自分の心のベースにあることと同じだと嬉しく思いました。大人からしてみれば、つい何かの役に立つから等と思いがちですが、子どもにとっては小さな経験一つ一つが大切な宝物です。これからも子どもたちが充実した学童保育生活を送れるように考えていきたいです。

【犬飼杏奈さん（あそびばクラブ　非常勤指導員）】

全体会『どの子も受けとめる学童保育をめざして』

子どもたちが、得意な分野を全国の人たちに楽しく過ごせている姿やのびのびとした姿を見せる事はとても、ほこらしく思います。

大人は子どもに対して、おしつけてしまう事があり、子どもにとっては、どう感じるのか、考える。脳にたまった気持ちを、子どもたちは指導員に伝えてくれる。学校での出来事だったり、家での生活を教えてくれる。とても、うれしい事だが、コロナ禍は、伝えるのが難しく感じてしまう。指導員が話しやすい環境作りをするのが大事だ。

子どもや保護者も、人とのかかわりがとても重要です。子どもの気持ちや保護者の気持ちは、1 人でかかえこまずに、周りの人と話すことで、受け入れてくれる場所がある。その存在、とてもうれしい事です。